

# カーネーションの12月出し一度切り栽培に関する試験

## 1 試験のねらい

カーネーションの需要は年末ピークがあり、品質を重視するあまり温室の周年切り作型でも年末から長幹切り出荷が行なわれていることも多い。そのため春先の出荷量が少なくなり総収量が減少するため経営上不利になる。そこで年末の需要期に長幹で高品質のカーネーションを供給するため簡易ハウス利用による12月一度切り栽培の作型について検討したので報告する。

## 2 試験方法及び結果、考察

### (1) 採穂位置 摘心節位、栽植密度等が採花時期と品質に及ぼす影響(昭59)

品種は、スケニア、ノラを供試しメリクロン採苗専用母株から採穂位置をそれぞれ分枝点から2,3,4,5節を残して展開葉4節で採穂した。挿し芽は6月7日に6cmポリポットにし、定植は7月2日に床幅80cmに20×10cmで中2条抜き6条及び8条植えとした。摘心は7月9日に、下から5節位と8節位とした。莖数の仕立ては、揃った芽を3~6本任意に仕立てたものと3本に制限したものを設定した。なお最低夜温は7℃に保持した。

m<sup>2</sup>当たりの採花数は、スケニアに対してノラの方が一般に多く6条植えと8条植え、3本仕立てと任意仕立てでは、採穂節位や摘心の深さによって異なるものの採花本数の多い限界は両品種とも8条植え任意仕立てに出現した。採穂節位と採花数の関係はスケニアでは一定の傾向は認められなかったが、ノラでは高節位で多い傾向がみられた。採花率は任意仕立てと3本仕立てでは、いずれの品種、条件でも3本に制限した区が高く6条植えで100%に達する区が多かった(第2表)。時期別採花割合は、スケニアでは一般に12月採花率が高く、多くの区で80%を占め区間差は少なかった。ノラでは採穂位置が高くなるにつれて11月までの採花割合が高くなる傾向がみられた。(第1図)

### (2) 定植時期及び日長処理が12月の開花に及ぼす影響(昭60)

採穂位置を4-5節とし、その他育苗条件は前試験に準じた。定植は7月4日、14日、24日とし(摘心は定植後5日目)日長処理を全期間長日区(摘心から120日間)、生育中期(6~7節)から長日区(60日間)及び自然日長区とした。なお電照方法は80W50lux以上の深夜4時間の光中断とした。定植時期が12月開花に及ぼす影響は第1表のとおりであり、7月4日定植に対して、それ以降の定植では採花率が急激に減少し特にスケニアでは著るしかった。これらに長日処理を加えると開花期は前進し、遅い定植でも採花率は増加した。(データは省略)しかし、7月14日定植の長日処理でも7月4日定植無電照区の採花数を上まわることではできなかった。長日処理は側枝発生の抑制、節数の減少、到花日数の短縮等の効果がみられた。しかし、開花の斉一化を図る効果はなく、逆に開花時期は分散した。

## 3 成果の要約

年末の切花数を確保するためには、スケニア、ノラ共に分枝点から4-5節の高節位で採穂し、8条植えの低節位摘心で揃った分枝を任意本数仕立てる、定植及び摘心は7月10日までに行なう。定植が遅れた時又は生育の遅れが心配されるときのみ長日処理を行なう。

(花き部 古口 光夫)

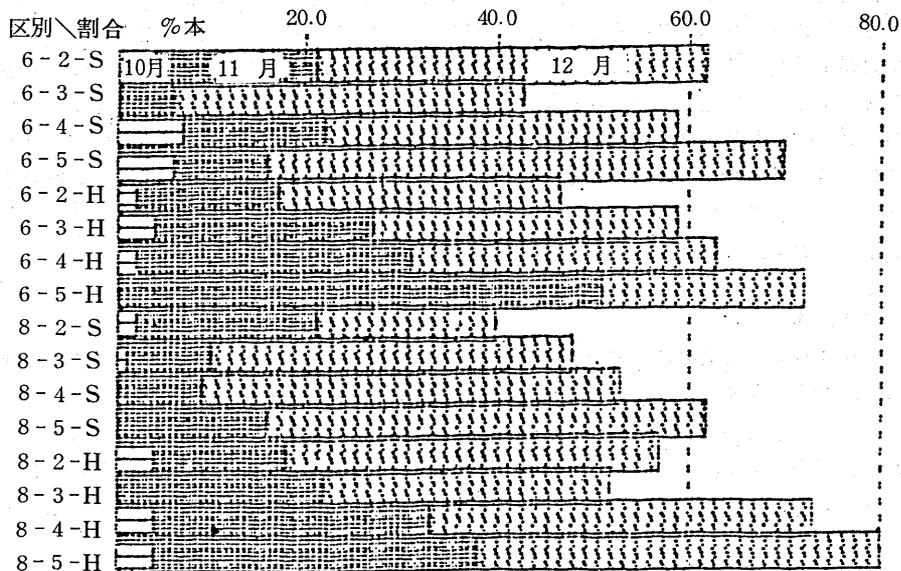
第1表 定植時期が12月開花に及ぼす影響 昭60

品 種	ス ケ ニ ア			ノ ラ		
	㎡当たり 採花数	株当たり 採花数	採花率 %	㎡当たり 採花数	株当たり 採花数	採花率 %
定植期 月 日						
7. 4	106.6	2.35	58.80	110.0	2.43	60.8
7.14	6.8	0.25	3.75	59.0	1.30	32.5
7.24	9.1	0.20	5.00	15.0	0.33	8.2

第2表 採穂位置、摘心の深さ、植付密度及び仕立て方法が採花に及ぼす影響(ノラ)

昭59

採穂位置 摘心方法	6 条		8 条	
	任意仕立て		3本仕立て	
	㎡当たり 採花数	採花割合 %	㎡当たり 採花数	採花割合 %
2-S	114.5	69.0	99.9	100.0
3-S	76.5	39.4	76.5	76.7
4-S	108.2	59.4	88.5	88.7
5-S	121.8	71.0	88.5	88.7
2-H	86.5	71.4	88.5	88.7
3-H	108.2	84.0	99.9	100.0
4-H	114.5	87.5	99.9	100.0
5-H	133.2	81.5	99.9	100.0



第1図 時期別採花割合(ノラ、任意仕立て)昭59

区別・6-2-S 6条植え-2節残し採穂-S-8節ピンチ  
H-5節ピンチ